

『こゝろ』を中心とした単元の構想

— 国語教育力育成の中で —

加藤 宏 文

はじめに

私は、かつて、高校生を学習者とした国語科学習指導のなかで、Aさんの『こゝろ』学習における到達点を、次のように確認した。ひとつの典型例であった。

○（前略）漱石の言いたかったのは、ただの恋愛や失恋、

そしてエゴイズムだけでなく、自分自身の明治に対する訣別なのではないだろうか。／作品の中に何度も「淋しい」という言葉が使われている。私には、この淋しさがよく理解できなかった。でもなんとなく、西洋文化の乱入の中で、それについていけなくておこる「郷愁」ではないかと感じる。だからKは西洋文化の乱入の中で非常に「郷愁」がわきおこり、とまどい自らの命を断った。何故か、Kがすごく純粹だと思う。そして先生もまた、「明治の精神」をもった人だったのだ。／時代の状況を考えると、Kや先生、つまり漱石の生きた時代は、すぐ中途半端な時代だと思う。結局彼等はいんな、その時

代に生きた人を含めて、新しいものと古いものの板ばさみになったのだと思う。その中で、Kや先生は自らを殺した。そして漱石はその時代を、自分から外に押し出そうとした。明治という時代に生きた人しかわからない、「板ばさみ」の中で生まれた精神は、彼等の根底に根強く存在したのだと思う。（後略。傍線加藤。）

（一九八三年八月一〇日 溪水社刊 拙著『高校文章表現指導の探求』二八二ページ参照）

さて、それから十六年、わたしは、本学人文学部二年生との「国語科教育法」において、未来の指導者の国語教育の具体的な育成の方法を、「模擬授業」の形で、実践しあった。学習者の『こゝろ』学習個体史をふまえて、その未来に求められる国語教育力育成を目指すとともに、『こゝろ』教材化の視点を、ひとつの主題『近代』は、二十一世紀に何を求めるか。の構想のもとに探究したものである。新しい「学力」観が具体的な検証を求めるとき、『こゝろ』は、状況の中でどのように蘇るか。

では、未来の指導者である私の国語教室の学習者は、『こゝろ』をどのように教材化したいと考えているのか。

(1) 高校時代の『こゝろ』の学習を振り返って

〈Bさんの場合〉 高校のときの授業は、ほとんど覚えていません。『こゝろ』には、暗い(黒い)というイメージしか残っていません。あまり好きじゃない教材だったと思います。(中略) やっぱり暗い部屋だと思えます。明治という時代がそうなのか、乃木大将という名前がそうなのかわかりませんが、全体が黒という感じを受けます。殉死がどうか、明治の精神とか私にとってどうでもいいことで、この暗い部屋に光がさすことがあったかな、と思うのが精一杯です。やっぱりあまり好きにはなれません。

〈Cさんの場合〉 (前略) むしろ、先輩たちが『こゝろ』の内容に関して議論していたことです。先輩達は部屋にくるなり教科書をひらいて、話し始めたので私は大変驚きました。彼女たちは、テストのためではなく、ただ自分たちが納得するために議論していたのです。その内容はいくつかあって、そのほとんどをもう忘れてしまいました。確か、「私」のしたことはゆるされるのか。「お嬢さん」の気持ち」などといったことがあったと思います。けれども教科書は中途半端で

終わっているので先輩達は、「ちゃんと本を読んでみようや」と言ってその議論は終わりました。私自身はただ何となく授業を受け、先輩達のような疑問もなく『こゝろ』を通りすぎました。そして『こゝろ』の本を読んだ時に思ったことは、「なぜ二人とも死ななければならなかったのか」ということです。死ぬことで何が始まって、何が終わったのか。なんだかもう一度『こゝろ』が読みたくりました。

〈Dさんの場合〉 『こゝろ』という作品を授業で初めて読んだ時、とても衝撃を受けて、家の本棚から漱石全集を引っぱりだして驚くべき速さで読んだ。それくらい『こゝろ』は重い小説だった。先生は、漱石の「則天去私」を説明し、精進や、道について、私達に考えさせた。そして、何故Kは自殺したのか、などを、感想文と一緒に書かせた。私の書いた感想文についてのコメントは、「よく書かれています。あなたの意見に、私も考えさせられました。いい感想文です。」だった。『こゝろ』は何回も読んでいたのだが、そのたびに考えが変わってしまう。授業で習った時は、Kに対して否定的だったがもう一回読んでみると、先生に対して否定的だったりする。しかし、「先生の遺書」において述べられていることは、飽くまで先生の考えなのであり、Kの立場からの描写はない。先生が自殺する理由とKが自殺した理由は違うのか、さらに

時代は関係するのか、これはKの方にもきいてみないと分からない。それを考えるのが読書の仕事かもしれないけれど。

(2) どの箇所を教材化したいか

ーグループ討議の結果ー

《B班》 上・二十八

〈一回目〉 叔父に裏切られることで、先生は目をひらいて周りを見るようになり、又いくら平生信用していた人でもいざとなると悪人になるという人間のエゴを見てしまった場面であり、そのエゴを自分の中にも見いだし、後の展開にもつながるものなので、このエゴについて追求することに意義があると思われる。

〈二回目〉 (上・二十九、上・三十、下・八にも拡大して)

前回の授業を発展させるという意味で、「実際の」という一語に注目してより細かく内容を見てみる。そうすることで、この節が後にどう影響していつているかを知ることができ、意義があると思われる。

〈主題文〉

○ 〈一回目〉 悪人になるとは、どういうことか。

○ 〈二回目〉 「実際の」とは、どういうことか。

《D班》 下・二二

〈一回目〉 「真面目」という言葉がもつ真剣さを確認するとともに、「真面目」という言葉が正面切って使えなくなっている自分たちの現状に気づく。

〈二回目〉 『ころ』における「真面目」とはどういうものか。また、その重さを知ると共に、現代のわたしたちにおける「まじめ」をも考えてみる。

〈主題文〉

○ 〈一回目〉 「真面目」とは、どういうことか。

○ 〈二回目〉 同右

《F班》 下・三十六

Kと「私」の二人の描写のしかたが、とてもおもしろいと思うので、その表現法に注目してみたい。この小説は、単にエゴイズムを描いたものではなく、恐怖に対する人間の弱さに始まる悲劇も描いており、この節は、その発端とも言える節ではないかと思う。

〈主題文〉

○ 「恐怖の念」とは、何か。

《E班》 下・四十一、下・四十八

〈一回目〉 この節は、「私」の利己心が現れるところである。窮地に立たされたとき、果たして自分は、「自分」を捨てることができないものなのか、それを学習者に考えさせたい。また、Kの反応を通して「私」の心の動揺をさぐり、人間のもろさを検討したい。

〈二回目〉 Kが自殺する場面、私の心の動揺と、K

の心情の両方がさぐられるところである。私は、衝撃を受けながらも、自分のことばかり考えてしまっており、Kは、自分の精神的弱さを卑下している。この両

者を対比させながら、本当の心の強さとは何かを考えてみたい。

〈主題文〉

○ ○ 〈一回目〉 「利己心」とは、何か。

○ ○ 〈二回目〉 私とKの心情をさぐってみよう。

《G班》 下・五十二

不安が、一人の人間の心理をどのように変化させていったかを考える。また、「不安を抱えたらどうするか」、身近なこととして考えさせる。

〈主題文〉

○ ○ 先生は、なぜ不安だったのか。

《A班》 下・五十三

先生の悲しさ・淋しさを考えることで、Kの淋しさと比較しながら、明治の精神につながる部分を考えてみたい。

〈主題文〉

○ ○ 「淋しさ」って、何だろう。

《C班》 下・五十六

〈一回目〉 先生は、自分の死を「殉死」と言っているが、明治天皇や乃木大将の死は、ほんのきっかけに過ぎないのではないか。本当の自殺の理由を考える。

〈二回目〉 「明治の精神に殉死する」という言葉を理解したうえで、先生が、自らの深い倫理によっておこっ

た淋しさを厭世観によって追いつめられ、自殺にまで

至ったということを知る。

〈主題文〉

○ ○ 先生は、なぜ自殺にまで追いつめられたのか。

○ ○ 同右

(3) どんな文や語句が焦点となったか

《B班》 上・二十八

○ ○ 田舎者は都会のものより、却って悪い位なものです。○ 普通の人間 ○ 鋳型 ○ いざといふ間

際 ○ 私は先生の言葉に大した注意を払はなかつた。○ 其先生のいふ事の、先生として、あまりに実際的なのに少し驚かされた。

(参照 上・二十九 意味といって、深い意味もありません。つまり事実なんですよ。理屈ぢやないんだ。)

《D班》 下・二

○ ○ 真面目 ○ 過去 ○ たゞし受け入れる事の出
来ない人に與へる位なら、私はむしろ私の経験を私の
生命と共に葬つた方が好いと思ひます。○ 私の心
臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたか
らです。

(参照 上・七 「私は淋しい人間です」)

(参照 上・十四 自由と独立と己れとに充ちた現代
に生まれた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味
はわなくてはならないでせう)

(参照 上・三十一) 「たゞ真面目なんです。真面目に人生から教訓をうけたいのです。」

《F班》 下・三十六

○ 立ち入った事 ○ 其時彼は突然黙りました。

○ 言葉の重み ○ 切ない恋 ○ 化石された

○ 失策った ○ 先を越された ○ 一種の恐ろしさ

○ 恐怖の念 ○ 利害

《E班》 下・四十一 / 下・四十八

○ 明け放し ○ 理想と現実 ○ 「精神的に向上

心のないものは馬鹿だ」 ○ 蹴散らした ○ 積み

重ね ○ たゞ ○ 要するに私の言葉は単なる利己

心の発現でした。 ○ 居直り強盗 / ○ 自尊心

○ 苦痛 ○ あゝ失策った ○ 助かった ○ 世

間体 ○ 薄志弱行 ○ わざと回避した ○ もつ

《G班》 下・五十二

○ 果敢ない希望 ○ 不安 ○ 自分以外のある力

○ 利害の打算 ○ 暗黒な一点 ○ 純白 ○ 書

物 ○ 自分にも愛想を尽かして動けなくなつたので

す。

《A班》 下・五十三

○ 厭世的 ○ 愚物 ○ 「貴方は此頃人間が違つ

た」 ○ 左右かもしれない ○ 妻に託まる

○ 自分に託まる ○ 寂寞 ○ たつた一人で淋し

くて仕方なくなつた

(参照 上・十四) 自由と独立と己れとに充ちた現代に生まれた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう)

《C班》 下・五十六

○ 明治の精神に殉死する ○ 乃木大将の殉死

○ 古い不要な言葉に新しい意義を盛る

(参照 上・十四) 自由と独立と己れとに充ちた現代に生まれた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう)

(参照 中・四) たゞ私は淋しかつた。)

三

これらの確認の上に立つて、私たちは、「模擬授業」を通して、どんな問題を浮き彫りにしてきたか。

(1) 人にとって「いざといふ間際」は、何を突き付けてくるのか。(B班 上・二十八)

〈まとめ 例〉 私が先生に「いざといふ間際」の意味を問いただすとき、先生は「金さ」とだけ答え、自分の過去には触れない。また、笑って答えたところなどまるで、私だけでなく、自分までもあざむき、ごまかしているかのようにもかんじられる。先生は、自分を「悪人」であると気付いていながら、それに直面する

だけの覚悟ができずにいたとも思われる。

(2) 「先生」は、「私」の「真面目」に何をみたか。

〈まとめ 例〉 漱石の考える「真面目」というのは、この作品からいえるように、真剣さや本気、信用といったことももちろんそうだが、それだけではないと思う。明治という時代に生まれた先生の過去を受け入れ、生きた教訓を得たいといった「わたし」をまじめだどとらえているから、このことから過去の中から何かをとりだし、それを生かせる人というのも、「真面目」に含まれると思う。

(3) 「先生」の「人間らしい気分」は、「化石」をどのよう

に「恐怖の念」に変えたのか。(F班 下・三十六)
〈まとめ 例〉 「失策つた」について、もう少し触れたいのでは、と思った。そして、もっと「私」のうろたえた心を詳しく見ていきかけた。あと、「彼の魔法棒」とか「恐ろしさの塊」「苦しさの塊」等の表現についても、触れた方がよかったと思う。また、恐怖の念から、そこには利害があるかないかという問題がでてくるかどうかは、疑問である。お嬢さんをとられるかもしれないということが、単に「恐ろし」かったのであり、そこには、利害のことを考える余裕がなかったのではないだろうか。

(4) 「K」は、その遺書で、「お嬢さん」のことを「わざと回避した」のか。(E班 下・四十一、四十八)

〈まとめ 例〉 Kがお嬢さんのことを手紙に書くことを避けたのは、そうすることで自分の弱さを認めたくなかったからではないだろうか。恋愛という物が信条に反するのであり、それをしてしまう自分が許せないのだから、先生は、もちろん悪いとは思いたくない。それを少しでもほめかすのは、それこそ自分の信条に反するのではないか。Kは、先生のためにわざと回避したのではなく、自分の信条をつらぬいただけだと思う。

(5) 「先生」の「寂寞」が「K」の「淋しい」を想起させ

たのは、なぜか。(G班・A班 下・五十二・五十三)
〈まとめ 例〉 Kは一人で淋しく死んだ、とあるが、どうして淋しかったのだろうか。恋をした自分に気づいた時、親友であるはずの「私」は、冷たくつき離したしまった。この時、Kは、「私」に助けを求めていたのかもしれない。「何か救いになる一言」を「私」がKにかけていけば、Kは自殺しなかったかもしれないのだ。Kは、「私」の冷たい言葉によってあらためて自分を愚か者だと思いついた。だから淋しかったのではないか。かといって救いになる言葉を「私」が述べたところで、Kはうけいれなかったかもしれない。それ位に思い込ませる程、Kの精神は強かったのだろう。

(1) 教科書所収関連教材一覧

1	○行 芥川 日本文の近代	新編 国語 第一 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
2	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
3	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
4	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第四 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
5	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第五 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
6	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第六 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
7	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第七 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
8	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第八 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
9	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第九 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
10	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
11	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十一 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
12	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十二 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
13	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十三 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
14	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十四 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
15	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十五 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
16	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十六 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
17	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十七 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
18	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十八 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
19	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第十九 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
20	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
21	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十一 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
22	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十二 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
23	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十三 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
24	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十四 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
25	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十五 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
26	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十六 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
27	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十七 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
28	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十八 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
29	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第二十九 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
30	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
31	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十一 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
32	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十二 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
33	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十三 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
34	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十四 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
35	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十五 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
36	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十六 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
37	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十七 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
38	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十八 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
39	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第三十九 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著
40	○行 芥川 芥川 芥川	新編 国語 第四十 新訂版	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著	芥川 龍之介 著 芥川 龍之介 著

そして、「私」も、そういう状況に陥ったのだろうか。この「淋しい」をどうとらえるかが、問題となるころだと思ふ。

(6) 「明治の精神に殉死する」とは、どういうことなのか。

(C班 下・五十六)

〈まとめ 例〉 「先生」は自分の信念が崩壊してしまつたために自殺する、とあつた。Kを裏切つたからではなく、Kを裏切ることにより、自分の信念がくずれてしまったことが原因で自殺するのである。それは、Kが、自分の信念からはずれた恋をしてしまつたために自殺したのと同じである。「先生」は、Kか死んだのを失恋の痛手のためだ、と考えていたが、実はそれが本当の理由だったのでなく、Kの精神も、明治の精神であり、その精神が崩壊してしまつたために自殺をした、ということが、ここに至ってはじめて分かつたのではないか。そこら辺を問いつめてみたい。

『こゝろ』教材化の視点が、確かめられてきた。

四

以上をふまえて、ひとつの単元をこう構想する。

(2) 主題単元『近代』は、二十一世紀に何をもちめるか。の構想 注 ☆印は、開発教材。

項目	種	頁	科目	内 容
1	○「自己心を」	上・二十八・二十九	管理	○「個性」といざ」とをばつて、「先生」の一人一人を説明しなさい。
2	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「若い」が「つと」を知りたかつたのは、何か。
3	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
4	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
5	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
6	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
7	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
8	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
9	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
10	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
11	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
12	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような
13	○「先生」の心	下・三十六	管理	○「先生」の心は、どのような

おわりに

『こころ』は、生き抜くことの核心にふれて、私たちを鋭く揺さぶる。あるときは、「明治の精神」とは何かの問題でもある。この多様な主題意識の可能性は、それ自身が尊重されるべきであろう。それは、漱石がそうであったと同様、私たち自身がこの状況の中で必死に生き抜いているからである。『こころ』が提起する問題は、多様でかつ重い。

ところが、この『こころ』の教材化の実情は、引き続きそれに背を向けてはいないか。たとえば、私の「国語」教室の学習者（高校生・あすの指導者）が切り出した諸問題は、何を求めるか。踏まえて、ひとつの単元を構想した。

一九九三・一一・二七記（山口大学）